

# 俳句

編輯局選

赤城子

馬に後れて馬子も荷負へり冬木立  
障子いつばいの冬日なりオサの音はつづ  
荒る、大地に生ける草あり冬の蝶

白鳥

林泉の笈は濡れぬ 青木の實  
叢杉や陽漏る、中の 藪柑子  
朝日子や門柱の葛ほそ散る  
何方の空の月かや 枇杷の花  
豆柿の葉もあらなくに小春哉

町田印力子

夜寒の灯によりそいて彫物す  
無産者の子が優等生の夜學かな  
木枯の吹き留り掃く靜かな

山茶花に開けはなちたり日の障子  
風さなる山の雲かや麥を蒔く

前橋 せきりや庵

俗界を離れて通る 枯野かな  
子を負た子の落葉焚く山路かな

高崎 乾 峰 月

落葉の大樹に寄生木現れぬ  
小春風馬糞に小虫 數多寄る  
長病みの木綿布團の 重さ哉  
枯柳の上にアンテナをさびえ立つ

雪

大澤 芝 秋

物質の雪精神の濁流唯物唯心  
雪のこまき表裏なければ尊し自然  
毒牙の雪花めつられ荒れ狂ふ末  
鳥獸右顧左眈慟哭下る山雪

## 文學の本質に就いて

所謂文學青年に與ふ

吉田 庄 藏

ある有名な本に *Vita sine litteris mors est* (文學のない生活は死である)云々言葉があつたと思ふ。

文學のない生活が死であることは、富に恵れない生活も死であり、科學のない生活も死である。文藝—藝術は阿片であり、酒である云々へばそれまでであるが、人間の社會生活に就いて考へて見たならば、藝術も人間の爲めに最も重要な役割を、又大なる使命を有するものでなければならぬものである。

然らば藝術とは何であるか問へば、從來の多くの場合、やつぱり阿片であり酒であつたに答へざるを得ない、大膽にかう云つたならば、所謂藝術至上主義者や舊來の文學者等は阿片とは何んだ、と恐ろしい權棒で喰つてかゝるであらう。彼等をして云はしめたならば藝術とは、無限大の世界である。不可説的な妙境である。そこにはまた神秘力がある。そこに精進があり、藝術の極致があるのだ。而して藝術の世界を、人類の到達すべき彼岸として人類を導

かなければならぬ云々であらう。然らば妙境の世界とは何であるか。凡そ彼等は適確な解答を得ないであらう。——當然である。醉眼朦朧とした彼等の食はる夢の世界を「かうである」、と確答の出来ないのは當然ではないか。また、よく彼等は云ふ、「藝術は自我の表現である」然らばその自我とは何であるか、我等は我等の愛する藝術の爲めに是等を解剖臺に上せる必要がある。それには藝術の起源や創造の動機を考へて見なければならぬ。我々の原始時代を想到しなければならぬ。凡そ人間は何時の時代にも生きる上に不安がある。原始時代に於ける人類の不安は自然の制約であつた。つまり彼等は暴風雨が神鳴りか、大洪水が、大地震が、疾病が、自然の制約に食物を断たれ、生命を絶たれる。慘ましく横たはつてゐるいさし親の姿、子の姿、兄妹の姿、友達をなごを眺めて彼等は極端に脅えおののいたのである。この自然の制約

に到底耐し難いこつた人類は始めて神の世界を想像するやうになつた。そして神に哀願し神を崇拜することに依つて始めて神は人類に不安を去らしめてくれるのだと考へて喜んだ。然しなほ度々神の怒りは起つた。彼等はなほ慰し難い不安を何ものかに慰さめやうとした。それが藝術の創造となつたのである。藝術は宗教に起源を持ち、從つて神學、形而上學、神祕學と分離し難い性質のものである。社會は進轉した。科學は進歩した。そしてこの科學に依つてある程度まで自然の制約を克服した。我々の世界は果して不安のない社會となつたであらうか? 自然の抑制から解放された我々は一層深刻な社會組織の抑制に束縛されてしまつたのである。社會組織の抑制は云々へばその大部分が資本主義社會の抑制である。資本主義的統制下に於ける國家もまた國民も完全に彼等の爲めに癡痺され蹂躪せられて居るのである。自然の暴威に依つて血と肉とをさいなまれた人類は再び社會組織の抑制の爲めに血と肉とをさいなまれなければならぬ。かの世界の人心を戰慄せしめた歐洲大戰亂にしてもさうである。數千億圓の富と數百萬人の生靈が白骨と變つたではないか。白骨を抱いてただ呆然と涙ぐむ親、かたみこつた手紙の断片をおし握つてむせびなく妻や子の姿!!、戰爭の結果は憐れなこつた民衆のすがたがあるのみだ。唯喜ぶ者は勝つた國の帝國主義者のみである。

あつたか。哲學であらうか、藝術であらうか、否その大部分を科學の力に俟たなければならぬことを知るであらう。人類は自然の制約の大部分を科學で克服しつゝある。同時に社會制度の制約を同じく科學に依つて解決し、人類の不安を、悅樂の世界にまで引上げなければならぬのである。

我々が藝術を創造する動機を精神科學の上から見たならば人體の器官の薄弱に由来する云々。たゞは視覚の薄弱の者は常人より物や形に注意する、咽喉の弱くものは美聲や雄辯に、聽覺の悪いものは勢ひ音楽や思索に長けるものである。

故に藝術家は何等かの不具者であり少くも何かの不満足不平者である。それと同時に社會的不安に脅かされつゝある人々の器官や神經は非常に薄弱であり虚弱である。即ち満足に欠いてゐる精神は正常な方法へ満足を求めることは出来ないから、餘儀なく異常な方向へ満足を求める。その結果が種々の幻想となり、表現となる。つまり藝術の創造となる。そして藝術家は人間に共通の幻想を捕へてこれを文字や、講布や、音律で、具體的に表現し、發表する而してその藝術に同感し共鳴するものがあれば藝術家は始めて我れと同じやうな慰し難い感情を要求を持つて居る者が多くあることを知つて悦び、安心するのである。

ある。ああ人類の慘憺!!、社會制度の矛盾!!、我々の不安を保護してくれるものに國家がある。この國家がかうした暴虐を敢へてするとは結局、資本主義的野望者の爲めに國家までが蹂躪されてゐることを立證してゐる。所謂彼等の野望は對外經濟關係に於ては國家を通じて戦争まで惹起させ、日常に於ける彼等の魔の手は民衆をして大なる不安と混迷の中へ陥し入れる。

見よ現在の社會の醜さを。これ見よがしに大道を闊歩するヒゲのおぢさんでも、紙切一枚に依つて首が左右になる今日の大瀆歩も忽ちにして明日は米糧の盡をたたい考へ込まなければならぬ運命に於かされてゐる。人間の労働は益々機械化されてくる。職を失つた遊軍が益々増える人口と生産關係とは比例しない。益々資本は獨占化し、政治も國家もすべてものが絕對專制下におかれて行く。

街道の巷を右往左往する人すがたは總身色を失つて疾病のやうである。路傍には飢へ苦しみに悶えて倒れてゐる人のすがたが所々に散見される。厭世思想が流行する、虐無主義が流行する、そして民衆は墓に冥路を死を懐しく思ふやうになる。つまり自殺が流行する、子供までが自殺をする。社會状態がこのまま推移したならば近々の將來に於てこいつ社會が實現されることは當然である、否實現されつゝある。こいつした悲惨な實狀を救ふものは宗教である。

そうであるからして藝術は生活の不安が多くなれば多くなる程その必要は増す云々形になる。これを自明としたのが社會組織の支配權を握るブルジョア階級であつた。彼等は民衆を不安と混迷へ追ひやつて置きながら、然もそれを糊塗し癡痺させる爲めに(宗教や)藝術云々、阿片や、酒を興へる。所謂藝術的形式の中に民衆の感情をさらへて置いて完全に民衆をデマゴグする手段として来たことは長い歴史に見てもハッキリ知ることが出来る。

そこに所謂舊來の藝術家なる者が「藝術は自我の表現である」云々語が藝術の本然性を持たない、何もかにもははれる自我の表現であることが判る。彼等の云ふ無限大の世界、不可説的な妙境でない、何ものかに癡痺される現である「云々」云々云々になる。そこには勿論全人類の藝術としてでなく、一部階級の藝術に止つてゐる。彼等は主觀的以外に見ることを知らない。現在我々の形づけられてゐる概念や觀念は、從來の哲學的、宗教的、資本主義的的文化の中に訓育されて来た一事を考へて見ても、それが全體性を持たない、一種のヒステリー患者であることを知るべきであるであらう。こいつ所謂藝術家が藝術を至上なるものとし、人類の社會を云々するに至つては、實に慨嘆に堪へないではないか。迎へたばかりの戀女房をながめ





ちやつた！

『五十銭くれたつて？』

『道理で君が歸つた後で男爵はクスクス笑つてゐたよ。』

『すつかりしよこんだ飛雄治君、翌朝自宅で見知らぬ紳士の訪問を受けました。』

『失禮ですが貴方が飛雄治様御座いますか？』

『金縁眼鏡をかけて何處ぞ大家の家令らしい其老紳士はさういんぎんに尋ねるのでした。』

『ハイ』

『私は齒白馬具男爵の使ひで参りました者で御座います男爵は』

『さうぞ堪忍して下さい。じ、實は名高い男爵閣下は少しも存じませんが、さうでもない失禮をしてしまひました。決して悪気があつてやつたことではありませんから是非お歸りになつて男爵へお詫びの程くれぐれもお願ひいたします。』

『男爵は、さ家令はニコリ笑つて續きました。男爵は貴方様にこれを差し上げるやうにさうして御座います。』

『差出された一通の封筒、表には『飛雄治氏露ラ嬢の御結婚を祝して。老ひたる乞食より。』と書かれてあります。開封するにパツパツと落ちた十萬圓の小切手！』

二人の結婚式が上げられたのはそれから間もなくのこと

媒酌人は世界にさきめく大富豪齒白馬具男爵だつたは目出度し

### 詩

#### 我等の太陽

岡田 實

ふらりふらり  
夢遊病者か  
魂の抜けた酔漢の様に  
生血を吸ひ取られて  
干からびた肉塊はさまよふ  
北風は懲辱的に交響樂を續け乍ら  
冷たい社會の淺い社會を  
限りなく批評し  
彼の青白い横面を  
遠慮なくひつばたたく、  
肉の切り賣り  
勢働方の投げ賣り  
互ひに傷つけ殺し合ひ  
そして  
生き乍らの干からびた  
骸骨はおどろき狂ふ  
ブルドックは  
温かい防寒用の毛皮の中から  
冷酷な嘲笑を投げて居る  
生き疲れた肉塊は黙々として  
何者も求むるのか

魔の様な膿孔の光の  
鋭くもあたりを射る  
瞬間……  
魔の膿孔に一閃の光はほほばしる  
お・太陽は赤く輝いて  
大家の頭上に温かき光りを  
投げてゐるではな  
雲も山も真赤に染めて  
輝いてゐるではないか  
沈黙の内に彼の魂は叫ぶ  
「吾等の太陽……」  
夕ぐれ  
シド・マイケル

夕ぐれは  
いづくに居るも泣ながれぬ  
嫁ぎ来て 日の浅れれ……  
父の母の山を眺めむ

#### 吹雪

菊池 盛男

憧憬を喜ぶ狂風  
世界は狂荒の吹雪だ  
お・人々が危く糖手されてゐる

疲れ切つた姿は消えて行くやうだ  
吹雪はなほ猛々しく荒れ狂ふか  
憧憬な吹雪よ、汝は  
世界をなめつくさる氣なのか  
あかつき  
村田 一

同志よ目覚めよ  
何ををぐつゝして居るんだ  
解放の鐘が高らかに鳴つて居るではな  
いかに達熱血の前にながら  
千人を一つの砲弾にするんだ  
目覚めよ同志よ  
死をさして闘へ  
闘つて死ぬのは我等若き騎士の本望な  
さあ行かう  
同志よ  
閑え  
吉田ミヨ子

なやましき夕暮れのしづけさ  
又我が胸はばうつき出だしぬ  
自然の……大なる期待の……  
生れ出づる新しき日  
然し一日々が過去になつても  
何にも得られぬ我れをかなしむ  
得らるるものは

### 歌

#### 春頭雑詠

小林文面朗

子を思ひ病む妻を憶ひ  
ひつそり  
俺れがひびりて  
迎へた元日。  
子の牛乳を  
夜半に起きてあたゝぬる  
火鉢の炭に  
痛いくちびる。

#### 戦線へ

新井 彌一

只だなやみのみ……  
おろか故にか  
あまりにもたかくなな心故にか  
戦線へ  
天地に響はん  
自由を闘争よ  
俺れ達は自由を愛するが故に  
闘争を求め  
自由の爲の闘争  
それは俺れ達の生きこし生ける間  
離るべからざる約束だ  
此の世に矛盾あるうちには  
いかでか戦旗を巻くべきや  
いかでか戦旗を守るべきや  
■菊池豊吉君詩都合上水鏡地(編者)

#### 春日雑詠

○△生

陽の光り春たけねれば眼に痛しわれの  
病は癒えざりにけん  
人の世のさだめに生くるかなしよよし  
みじみ春の陽を浴みて立つ  
窓からかき八つ手青葉の春の雨きつゝ  
そぞろ人懐かしき  
しづかにも梅の花散る山かげの公園に  
来て君さかたりぬ  
年たちてか山かげの梅の花……だ咲  
けきも君はかへらず

### 俳句

#### 羽子

久保田 白鳥

仰向いて漣なミ落ちね羽子の娘よ  
それし羽子ツト来て沖が咬へ去る  
花街や羽子追ふおみなはしきよし  
遺羽子の娘等駿うめける戸の面哉

こほろぎのカバネ哀れや霜の朝  
書初やすみもゆたかに 光る文字  
七草やまた春若き 艸の色  
閑々保  
吉田ミヨ子

忘れ羽子のいしくも凍てし拾ひたる  
塀の礎に 折々高き 羽子 見する  
遺羽子や 落陽の春く倉の 屋根  
羽子の街おほらかに日の沈み行く  
植込の いづらにけん夕羽子の  
羽子の娘よ松折られめや下見すて  
薪置きし 蔵のわきなる 蔭地かな  
探梅や 幾曲りして 寺の門  
松節り取りて 淋しき 街路かな  
よいされの 何の、しるや 寒詣  
訪へば友は 風邪の 一間かな  
田家の朝  
くたかけの 春告げ渡る 山田の家  
長閑さや明日もお留守の袖た、み  
朝の間に 花の下掃娘かな  
源  
小林立  
桃

#### かなしき早春

小林きわ子

吾が病めば寒けき朝をさくも起き飯炊  
くなるかなし夫はも

#### 歳末雑詠

吉田ミヨ子

いのほのこみ明けはなれゆく山道を獵銃  
肩に急ぐ人あり  
迫り来る師走の聲をわれは聞く赤城嵐  
のいこゝ寒けき  
あまりにもなやみ待つ事の多くして年  
を迎へる我れは淋しも  
十六夜の月の光りはひえく、雑木林  
の上にかゝるも

#### 思ひ出

赤石 N・子

打ちもだした夕さき空をながめつゝ、又も  
こひしき思出の湧く  
あ、淋し昨日も今日も床に臥した、夢  
かなしやな胸に秘めたる過ぎし日の思  
ひよみがへり吾れをなやます  
うら、かに照りがやける野の道を友  
さ歩みぬ春はうれしも

『上毛大衆』昭和四年三月号は発売禁止  
『上毛大衆』昭和四年四月号掲載文芸欄

前號發賣禁止 THE JŌMŌTAISHŪ  
(行發日一初一月初)行發日五十二月三年四和昭和印日五十二月三年四和昭和

# 上毛大衆

選舉廓正號

四月號

一部金十錢



第二卷 上毛大衆社發行 第四號  
住波郡呂村今泉二八九 佐波郡呂村今泉二八九  
電話伊勢崎番八七一 振替口東京七九六〇五

詩

めしい鳥

吉田みり子

めしいて哀れな此の鳥は  
其の名も悲しきゴゼ娘  
知らぬ他國の町々を  
さびしき村を次々に  
遠くはなれし古里の  
み山の雪がさけるとも  
漂泊ひてゆくゴゼ娘 四二、二七

草

松井三七

柔らかな淺緑……  
かそけくも地より湧く  
春の歌に  
想ひ描へて  
萌え出てし若草よ  
何をか願ふ  
何をか求むる  
たゞ生長の歡喜に

萌え競ひし若草よ。  
御前の前途よ。  
雨か 風か。

女工行進曲

松井三七

淺草行進曲替唄

戀知る年頃十七八を  
黒い工場着ゴムゾウリ  
花の顔せ綿埃り  
私しやかなしい機織乙女  
戀も知らずに青春の日を  
戀を追ふ娘の絹を織る。  
粧こらしてレデー氣取れぎ  
指環のビーズ玉色あせて  
夢の生命に涙する。

歌

訓練所雜感

萩島 獨塵

在營期間短くなるこ

ここにさらに  
× 訓練所入をすめし人はや。  
町費にて半額負擔  
をするからに服をつくれこ  
すすめし人はや  
× 大方は半額負擔を  
よるこびて  
訓練所をつくりけるかな  
× そのなかに吾ひこりなりき  
袷天着古鳥打の  
訓練生は  
× 訓練をする訓練に  
服が何だ！こ  
力みて見たり  
× 訓練生百人あまりあるこいふ  
吾が町にして  
銃は四十なりき

檢閲を見學に來よこ  
× 訓練所の主事は云ひたりき  
浴衣着て居りき  
× 一時間見學に來れば  
二時間に出席つける  
云ふ主事なりき  
× 訓練所の報告は  
大方ウソ云ふ  
新聞の記事いつかありしかな

時事漫歌

連 無 三  
貧すれば鈍する それもそうだなあ  
選挙の度に買はれる人間。  
床次か濱口か またかぢりつきか  
そんなこより 先づおらが村。  
おらが内閣 なぞこぼさく  
村の家から 組みあけてゆくおらが  
議會  
政争は 黨争なりき 黨争は  
目くされ共の切り賣り争ひ。

俳句

田代して帆

長閑さや障子に響く糸車

云はぬ日のこみに永けれ  
いさかひて淋しき心やるせなく庭面に  
行ちて月を親しむ

やめましよう 金こ地位こて  
押してくる代表にやる 汚い一票。  
情實でねえいだれだそんなこ云ふ  
奴は一票たりこもやつたまるか。  
吉田みり子  
モズ鳴きし秋もいつしか去り逝きて雪  
雲おほへる冬こなりけり  
いねがて、庭面にたてば有明の月の光  
のいここに泌む  
いたつきの病の床に早や四月兄のみ胸  
はいまだいえずも  
何故かわりなき涙こめさなくながる、  
我こなりにしこの頃  
いえ難き父の病を案じつ、かけの鳴き  
聲さびしくきくも

笑 三 雄

貧しくて早やも三年は過ぎにけり胸の  
病の未だ癒えなく  
貧しさは尙もこの上暮ららむいまだも  
癒えず胸の病は  
卵さへあがない得ずてわが病日々につ  
のるかたつきはかなし  
暮れ早き頃日なりしにいさかひてもの



それが何んもなく全面的に加へられる重壓に反抗する機能の躍動も見え、それがやがてぶつぶつと沸騰する蒸氣に化すやうにも思へた。

いや、やつぱり彼女は塵埃を化合して作られた女なんだ。彼女は梅毒の経験もあるだらう。それが彼女の艶々しい顔にも一種の荒んだ狂相を表して居るのだ。

やがて近づく晩秋の冷気に衰へ行く虫のやうに淋しい自らの姿を凝視する彼女がやないんか。

それこそ人間としての感能の刺激を感受する能力に狂ひを生じ、神經は變則的活動の常習犯になつて單なる淫蕩的な冷血動物としての彼女になるんぢやあないのかしら。

男はジーツと彼女に見いつてゐた。

男は突然叫んだ。

『きよちゃん、貴女は自暴自棄になる事はないかい。』

女はたまげたやうにギョツとした。

『そりやねえ、あるさ!! 貴郎が云ふだけヤボぢやないのい。』

いやだ、いやだ! 獅子鼻! チョボヒゲ、老蒼、わたしやツツを逃げやう逃げやうと幾度思つたか知れやしない。逃げるどころか死なうとさへ思つた事が幾度もあるのよ。だけれど一昨晩話したやうにわたしにや立派な亭主があるの、ニョキニョキした鐵のやうな腕の、頼母しい夫があるの、それはつかりにわたしや生きてゐるの!

わたしや何時も思ふわ! わたしが生きて居て社會的にわたしたや何時も思ふわ!

### メーデー歌

『アムール河』の諧

1. 聞け萬國の労働者 轟き渡るメーデーの示威者に起る足ざりこ 未來を告ぐる開の聲
2. 汝の部室を抛棄せよ 汝の價值に目醒むべし 社會の虚偽を撃つものぞ
3. 全一日の休業は 無産の民よ蹴起せよ 階級戦は來りけり
4. 永き搾取に惱みたる 今や二十四時間の 起て労働者、奮ひ起て 奪ひ去られし生産を 正義の手もて取り返せ 彼等の力ないものぞ
5. 我等が歩武の先頭に 掲げられたる自由旗を 守れメーデー労働者 守れメーデー労働者

害毒を流す事さ、生きて居て社會的にある仕事を助ける事は、さちちが比較して大きいかさ云ふ事をねえ。わたしや一種のメカニズムだわ! 人間の機能も快樂の衝動も全部發散してしまつた一ツの物質だわ。

それは今の金のやうに汚いけれど、あの人は唯一の物質としてわたしに涙をこぼして感謝して下さるわ。

彼女の顔は激情を昂貴に血走つて、目には涙が一杯光つた。

男は打ちのめされた、やうに小さくなつて、ただキョロ

く彼女の姿を眺めてゐた。

『ねえ、澤ちゃん。もうわたしなんか駄目だけれど、それでも日本職業婦人の一人として力強く生きて行くわ。』

それから見れば、貴郎などは、まだ未來のものよ。お分りになつて?』

男は激昂した。そして唇をふるはした。

『貴女の血は燃えて居る。僕にもその火が燃えうつたやうな氣がする。やつぱり生甲斐のある世の中なんだ。』

彼は立ち上つた。

戸外は何時の間にか狂暴な風が吹いて居る。風速十五米

突も思はれる突風は多角形の建物に目くら減法ぶち當る音が聞える。

公園の水仙の芽は三寸四寸すくく伸びて行く……。(昭和四四廿八日)

### 口語歌 メーデー詠歌

南 采女

私は若葉の蔭で歌ひます

今日の記念日メーデーの歌

メーデーは世界のプロレの祝日です

五月の風にひらめく赤旗

勇ましい行進曲がきこえます

あれが同志のデモンです

工場と野良から出てきた多くの同志が

聞け萬國のメーデー歌

歌聲が高く響くよメーデーの日

搾取の鐵鎖つまでやるんだ

一九二九、五

『上毛大衆』昭和四年六月号は休刊  
『上毛大衆』昭和四年七月号掲載文芸欄

上毛大衆  
七月號  
社衆大毛上  
第二卷第六號 一部十錢



創作

### 義民 高橋五太夫

小林邦作

『地震は切利支丹バテレンが起したんだらう』

斯う云ふ噂が關東一帯に擴がり渡つたのは地震のあつた日から三日もたぬうちにあつた。それは水中に投ぜられた石が描く波紋の様に次から次へに傳波して口から耳へ、耳から口へ誰かからさしはなしに人々の間に言ひふらされた。

恰度三日目の夕方である、村から村へ梵鐘が亂打されて恐怖の夜の幕は切つて落された。

法螺の貝を吹く音は猛獸の唸る様に遠く近く響き渡つた。

『武州熊谷を焼き拂つたバテレンの一隊は河利根川を越へて上州に入り込んだ』

斯うした流言蜚語が矢の様に人々の頭を衝いて行つた。『それ皆そなへろ!!』

鐘、太鼓、法螺貝、竹槍、日本刀、火繩銃、喧嘩、混亂絶望、恐怖がその後に續いた。

兼ねてバテレンの奇蹟に怖れをなして居た百姓共は色々の想像と臆測に目の色を變へてウロタエた。

『バテレンの女が井戸へ毒を入れて歩いた』

『旗本の邸宅がバテレンのために焼き拂はれた』

『バテレンには地震が三日前に譯つて居たらう』

一犬が虚に吼へて萬大は實を傳へるのだ。特にバテレンの超人的行動を子供時代の廢物語りから聞かされて居た一般人はその恐るべき巨人の襲來に極度の恐怖を感じて居た。

今や退魔寺の庭に勢揃ひした狂徒——彼等は襷鉢巻で手に手に竹槍、日本刀を持つて何か口ばし居る、皆狂亂の態、中には感激して泣いて居るものもある——が出發せんとし居た時一人のサムライが馬で馳せ付けた。

彼は懐から何か書付を出し馬上で怒鳴つた。

『百姓共!! 伊勢崎御城主酒井日向守様の御フレイである、よくぞ聞け!!』

彼は斯う云つて書状を擲げた、今まで狂亂して居た百姓共は御城主に聞いて静まり返つた、而して何事かミカタツを呑んだ。

「此の度江戸大地上に際し亂臣叛士の此れに乗ずる者甚だ多し、特に近時三代家光公此の御法度に依つて嚴禁せしバレンの教を信する者漸く多く、是等の者は皆國法を侵す罪人なるは勿論國土を賣り、財を掠め國家滅亡の基を爲す者なり、今や此のバレンの逆徒隊伍を組んで我が地に入るを聞く、者共よく此れが侵入を防げ、特に向ふ三日間百姓共の帶刀を許す」

「ハ……」  
騎士は去つた、嗚呼が狂徒から送られた。夜に入るまで所々にタイ松が焚かれ、警備は嚴重に旅人は裸にされて檢べを受けた。鐘、太鼓、法螺貝は恐怖の夜を通して喧騒を色彩つた。

百姓のためにその身を捧げたもの云つてもお里は夫、五太夫の歸りが餘りおくれたので不安でたまらなかつた。地産以來色々々の噂に針の様に鋭つた彼の女の神経はスツカリ疲れ切つて了つた、特に「バレンの親玉吉田松蔭が旗本の手で殺された」云ふ話を耳にしてから彼の女の落膽は一通りでは無かつた。夫も同じ運命に「と思ふ彼の女は居ても立つても

それは彼の女が五太夫と結婚して間もなきことであつた。一夜お里は夫から不思議なことを話された。五太夫は僕から大持そうに四角なものを取り出しそれを押し載せてお里の前へ出した。お里も無意識的に夫のした行爲を繰り返してそれに見入つた。然しそれは彼の女が未だ曾て見たことのない立派な鏡で而もその鏡の上に名の知れない人の像が描かれてあつた。五太夫は静かに口を切つた。「お前は此のお方がごなたであるか知つてゐるか」

「いゝえ知りません」  
彼の女は微かに首を振つた。「これは父イエス・キリスト様の御像だ、キリストの教は三代家光様時から禁じて居る、島原の亂以來全く日本からは断つた管だ。然し断つてしまつても断つてしまつても出来ぬのは父の御教だ、防がうともしも防ぎ切れぬのは眞理の道だ。御法度を恐れて表面は全く無い様ではあるが此の教を信じ、眞理の道を研究して居る人々は澤山あるんだよ。俺もその一人だ、俺もその一人だ、俺はそれを誰にも話さない、お前にすら話さない、今日まで思つて居たのだ、然し何時かは知れることだ。その時になつてお前を悲しむの淵に落すはあんまり不惑な話だだから今日はお前によく得心の行くように話しておこうと思ふのだ。

俺は今御法度に叛く正に罪人だ、お前はその罪人の妻だ、

居られなかつた。五太夫を神様の様に崇拜して居る百姓共もお里と同じ様に五太夫の歸りがおくれたので案じて居た。然し彼等の不安はお里のソレは全然異なる立場に在つた。

「彌七さんや五太夫様はもうトツクに歸る筈だつたにござうしたんだんべいなあ」  
「そうだなあ、うまうワタリが付つればよいが、強情の方だからワタリがつかなければ歸るめーよ」  
「何か間違が無ければええが」  
村の辻で出くわした二人の百姓はこんなことを話し合つた。

五太夫の留守宅では毎日村の人々が集つて彼の歸りを待つて居た。彼等は自分達のために五太夫夫婦が特別の苦勞をしなければならぬと思ふ氣の毒でたまらなかつた。而して色々とお里を慰めた。然しお里は「大切な御用で行かれたのだから、そうもよつくりは行きませう、然し今日は歸りませうよ」

斯う云つて却つて百姓達を慰め返した。お里は自分の心の悲しみ不安を人々に見せまいと骨折つたのだから自分だけで少しもへこたれない氣で居た。然し彼の女の胸にコペリ付いて夜まなく畫まなく彼の女を憐れむバレンの悪夢には彼の女の意氣も次第に疲れて今は如何してもその不安を頭からスツカリ拭ひ去ることは出来なかつた。

然しお里よく聞いてくれ。一體今の徳川の政治が何時まで續くと思ふ大名の精神は腐つて居る、武士は墮落して居る、凡ての大名、凡てのサムライが皆同じだ、幕府はもう此れを如何することも出来ないのだ。幕府にはもう日本を治める力はない。此んな腐敗し墮落した徳川がいかにか立派な御法度を設けようと思はなんにもならないじやないか。  
見よ!! あの上地方に八釜しい志士の奮起はみんな俺達の同志だ、眞理の探求者だ、この次に來る新しい社會は是等眞理の研究者に依つて築かれる眞理の政治だ。俺はこんな腐敗果てた幕府の政治に服することはない。例へば國家の御法度に觸れようと思ふ眞理の使徒でありたい。例へば悪非道の罪人と思はれ様は俺は眞理の前には潔白でありたいのだ。

父イエス・キリストの御教は決してお上で云ふ様な國土を貪り、財貨を奪ふことではない、それは萬人に安らかなの生涯が送れるように、此の世に淨土を打ち建てようと思ふのだ。  
見よ、徳川の政治を、大名は酒色に耽り耽り邸宅を廣大にし、參勤交代云ひ江戸への贈物云ひ贅を盡して居る。それに引きかへ百姓共はさうだ、彼等は年貢を納めるために生れて來た様なものだ。

俺は如何して來た徳川の政治に服することは出来なかつた、

こへ御法度に觸れようとした、若しそれが新しい社會、眞理の政治を打ち建てた礎となるなら俺は喜んで罪人の惡名も被よう、狂人の許りも受けよう、而して眞理の前に殉じようと思ふのだ。お前もその覺悟で居てくれ。

つまらぬ小才を武器に胡亂化しの人生を送るよりも、あの虐げられた百姓を救ひ新しい社會を造るために生命を捧げるこその方がごんなに意義ある尊い人生であるか知れないか俺は思ふ。

然し此の意義ある光榮ある事業に従ふ者には必ず魔の手が擴がる、何時かは時度やつて來るだらう、俺もお前にも、それを俺達は今から覺悟しなければならぬ。俺が此の後此の道でごんな迫害に遭ふことも、お前はそれをなげいてはいけぬ。

俺は誰が何んか云ふ父イエス・キリストの教は捨てない、眞理の探求は止めない決心だ。お前は只自分が百姓を愛し、國を愛す志士の妻であることを忘れなければよいイエス様の教を信する者にはあつた幕府から毛蟲の様に嫌はれ賣國奴と罵られて居る、吉田松蔭、佐久間象山、橋本左内を始めて置いた未だ世に現はれない無数の志士が居るのだ。斷つて置くが此の度呂でも俺のみではない、福島兵左衛門様や品川太郎兵衛様も同じ仲間だ、只誰も知らないのだ、又知れたら大變だ。

是等の志士は將來徳川を倒し、天子様の御旗の下にイエス様の御法度を信する者だ、お前は只自分が百姓を愛し、國を愛す志士の妻であることを忘れなければよいイエス様の教を信する者にはあつた幕府から毛蟲の様に嫌はれ賣國奴と罵られて居る、吉田松蔭、佐久間象山、橋本左内を始めて置いた未だ世に現はれない無数の志士が居るのだ。斷つて置くが此の度呂でも俺のみではない、福島兵左衛門様や品川太郎兵衛様も同じ仲間だ、只誰も知らないのだ、又知れたら大變だ。

つた云ふ話を聞いた時は酒井様を恨んでこんな大名の下に生きて居る百姓を憐れんだ。  
お幼友達のおしんは十四の時の春世話人が來て連れて行かれて了つた、その頃お里は只淋しかつた。然しあつておしんも矢張り悪政の犠牲になつて身を苦界に沈めたのだ。知つた時は彼の女のために泣いた。而して上役人には如何してこんな困つて居る百姓の苦しみを知れないんだらうと思つた。

それにしても彼の女にまつて不思議なことはあんなに苦しみながらも百姓は歌の様に只黙つて上役人の云ふまへにおさなく年貢を納めてゐることにあつた。借金し、馬を賣り、娘を女郎にまでして年貢を納め不平一言はずに黙々として生き行く百姓共の眞理の使徒でありたい。例へば悪非道の罪人と思はれ様は俺は眞理の前には潔白でありたいのだ。  
時々彼の女はうんざり強い人が出て彼等のために叫んでくれ、ばよいがと思ひ、それを心に願つて居た。  
然し生きて居るのか死んで居るのかを疑はせる程彼等は壓へつけられ首一つ上げる氣力さへも失つて居るのだ。  
お里は長い間自分が心中求めて居た強い男を目のあたりに見た、而もそれは自分のいさしい夫であることを知つた彼の女の喜びは一通りではなかつた。而して二人をめぐり合はせてくれた神様に心から感謝した。  
此の事があつたから五太夫は一夜もキリストの話をしたことは無かつた、お里も聞こうと思はなかつた。従つて五

ス・キリストの政治を日本國土の上に建てようと思ふのだ。見よ此の鏡を見てくれ」  
五太夫は例のイエスの御像のついで鏡をまつて續けた。

「此の鏡がキリストの精神だ。嘘も作りもない、そのまゝの吾々を見て下さる。政治は公明でなければならぬ。此の鏡の様な政治を立てるのだ、此れこそ眞理の政治だ、キリストの政治だ、而して俺はかう云ふ政治の出来る社會を造るために働くのだ。何んか尊い事業ではないか」  
五太夫は斯う云つて口を閉ぢた。

お里は何んか云つて夫に返事をしてよいか知れなかつた。夫にそんな恐ろしい秘密があらうな、は夢にも知らなかつた。彼の女は最初五太夫の話を聞いた時、國家の法度を侵す罪人それは現在自分の夫であると思ふ如何してよいか知れなかつた。

然し五太夫の言葉は一言一句皆眞理であり正しくないものは無かつた。而してそれはだんくお里の衷心に燃ゆる義侠の精神に喰ひ入り彼の女の全部を征服せずにはおかなかつた。  
お里は子供の時から百姓に對するお上の取立があまりにひどいので幾度義憤に小さい胸をオドラしたか知れなかつた。昨年は米が穫れないのでその代り馬を賣つて年貢を支拂

大夫が未だ同じ様にキリストの道を研究して居るのか居ないのか少しも譯らなかつた。勿論例の御像を持つて居るのか居ないのかも知れなかつた。  
然し五太夫はその後メク／＼と男を上げて行つた、三十年に初めて新役に擧げられ、越へて三十五の春には里正(名主)の要職に就き茂呂、今泉兩村の一切を委ねられた。  
お里は只斯うして夫の信望が日一日高まつて行くのが何より嬉しかつた。そうこうして居る中、長い間彼の女が心に希つて居た日が遂に來た。

上に縛り付けられて身動きの出来ない程虐げられ制へつけられて居た百姓が動き出した。伊勢崎二萬石百姓の代表として五太夫が波志江の上岡元清、宮子の井田右門、共に重大の使命を帯び江戸へ向つて出發したのは安政二年九月二十二日で江戸の大動亂から十日前のことであつた。天明の大饑饉に繼いで淺間の噴火灰に見舞はれた上州一帶の地は毎年の位部分的饑饉に襲はれて百姓の疲弊困憊はその極に達した。特に赤城山中に源を發する粕川の流域に屬する村落は年々の旱魃に河水涸渇してトウ／＼耕作不能になつて了つた。

耕作の運命を全然天に任せる此の土地の百姓達は年々田植の時期がおくれば行くのが不安でたまらなかつた。一昨年は七月の二十日には種付をしたへて二十一日から農休みが出来た。昨年はそれが二十六日、なれば終らなかつた。



